※講演内容抄録※

「高齢者肺炎の予防　～口腔ケアとワクチンの重要性～」

三重県立一志病院　院長
丸山　貴也

肺炎は日本人の死因の第5位を占める主要な疾患であり、高齢になるにつれてその発生率および死亡率は著明に上昇する。肺炎による死亡者の95%以上は65歳以上の高齢者である。高齢者が肺炎を発症しやすい背景として、基礎疾患の存在、加齢に伴う免疫機能の低下、嚥下機能や咳嗽反射の低下、さらに気道線毛輸送系の機能低下などが挙げられる。

これらの病態生理を踏まえた予防策が重要であり、日本呼吸器学会は「ワクチン接種」と「口腔ケア」を高齢者肺炎予防の両輪として推奨している。なかでも誤嚥性肺炎は高齢者肺炎の大きな割合を占めており、高齢や基礎疾患、特に脳血管障害に伴う嚥下障害を背景に、口腔内常在菌である連鎖球菌や嫌気性菌が下気道へ侵入することで発症する。そのため、口腔内を清潔に保つ口腔ケアの実施は、肺炎予防において極めて重要である。

『肺炎診療ガイドライン2024』では、口腔ケアの有効性について統合解析が行われ、その結果、肺炎の初回発症および肺炎による死亡を有意に抑制することが示され、口腔ケアが強く推奨されている。

一方、高齢者には肺炎球菌ワクチン、インフルエンザワクチン、RSウイルスワクチン、COVID-19ワクチンの4種類のワクチン接種が推奨されている。特に肺炎球菌ワクチンに関しては、新たにタンパク結合型ワクチンであるPCV20およびPCV21が使用可能となり、より幅広い血清型への予防効果が期待されている。また、インフルエンザワクチンについては、次年度より高用量インフルエンザワクチンの導入が予定されており、さらなる予防効果の向上が見込まれる。

本研修会では、高齢者肺炎予防における口腔ケアおよびワクチン接種の重要性について、自験例を交えながら概説する。